

平成25年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」 プロジェクト型

研究成果報告書

研究課題名：近現代ロシア文化史における祖国戦争

申請者：鳥山祐介(千葉大学文学部・准教授)

構成員：梅津紀雄(工学院大学・非常勤講師)

大森雅子(日本学術振興会特別研究員 RPD)

越野剛(北海道大学スラブ研究センター・准教授)

福間加容(千葉大学文学部・非常勤講師)

本研究の目的・背景：

本研究は、1812年のナポレオンによるロシア遠征(祖国戦争)という歴史的イベントが、同時代からソヴィエト期に至るロシア文化の中でどのように表象され、どのような影響を及ぼしたかという点を、文学・音楽・美術・メディア・大衆文化など様々な角度から総合的に考察し、近現代のロシア文化史に対する新たな視座を獲得することを目的とする。

1812年の祖国戦争は、他の欧州諸国と同様にロシアでも国民意識覚醒の契機になったこと、また後のロシア文化の規範となるプーシキン、グリンカ等の登場前夜にあっていたことから、近代ロシア文化の方向性を決定づける大きな要素となった。また19-20世紀を通じて、トルストイの『戦争と平和』やチャイコフスキーの序曲『1812年』、プロコフィエフの歌劇『戦争と平和』をはじめとする多くの文学・芸術作品の題材になったのみならず、独ソ戦など後の歴史的局面で想起されることでナショナル・アイデンティティ再確認の手段にもなった。とはいえ、こうした文化史上の重要性にも関わらず、この戦争を軸として近現代のロシア文化に総合的、通史的にアプローチする試みはこれまで日本ではあまり行われたことがなかった。この点に鑑みて、申請者(鳥山)は平成24年秋の日本ロシア文学会研究発表会でワークショップを組織し、「祖国戦争期の疎開と文化」「歴史小説と闘う女性の表象」「ヴェレシチャーギンの連作『1812年』」「ロシア音楽史の中の祖国戦争」「大祖国戦争期の大衆文化におけるナポレオン像」といった問題を扱った。

本研究は、そこで得られた研究成果について、最終的に論集という形で公刊することを念頭におきつつ、そのさらなる拡大、深化を試みるものである。

研究実施の概要：

本研究では、平成24年秋のワークショップの研究成果を引継ぎ、メンバーがそれぞれ担当するテーマに関する研究を継続し、文献資料の調査、分析を行った。資料収集には東京大学附属図書館、千葉大学附属図書館、北海道大学附属図書館等を利用した。また、鳥山

は全体の統括、祖国戦争の文化的記憶全般に関する総合的な調査を行った。

平成 25 年中には研究打ち合わせを 6 月に一回、研究会を 3 月に一回、いずれも東京にて行った。また、平成 26 年 1 月前半には福間がモスクワへの調査旅行を、3 月末には鳥山がヘルシンキへの調査旅行を行った。本プロジェクトへの助成金は、3 月の研究会の際の参加者の国内旅費、及び調査旅行のための国外旅費として用いられた。

平成 25 年 6 月の研究打ち合わせでは、助成金の主な用途、今後の研究会の開催予定、研究成果発表の手段等について確認を行った。

平成 26 年 1 月（5 日－13 日）の福間によるモスクワへの調査旅行では、書店や図書館にて版画、図像資料等を含む関連資料を収集したほか、2012 年に開館した「1812 年祖国戦争博物館」および「ボロジノ戦闘パノラマ博物館」を訪問した。博物館訪問では、祖国戦争という歴史的イベントが後世の人々にどのように記憶されているかという、本プロジェクトの中心的な課題に向き合う上での貴重な視座が得られた。また、1812 年祖国戦争博物館には、それまでまとまった形では公開されていなかったヴェレンチャーギンの連作絵画『1812 年』が、一つの展示室にまとめて展示されており、美術における祖国戦争の記憶を考察する上で非常に貴重な機会となった。

平成 26 年 3 月 10 日の研究会では、福間による調査旅行報告の後、福間、梅津、大森、鳥山がそれぞれその時点での研究成果の報告を行った。福間は 1812 年祖国戦争博物館におけるヴェレンチャーギン連作絵画の展示について、梅津はチャイコフスキーの祝典序曲『1812 年』とプロコフィエフのオペラ『戦争と平和』という祖国戦争をテーマにした二作品が独ソ戦前後にたどった運命について、大森は独ソ戦期の大衆文化（ポスター、風刺画、映画、アニメ）に現れたナポレオンとヒトラーのイメージについて、それぞれ情報整理および考察を行った。鳥山は同時代から 20 世紀に至るまでのロシア文化における祖国戦争の記憶に関して外観を行い、さらに 1812 年という年号や祖国戦争という呼称によってこの戦争のイメージに特定の形が与えられることについても言及した。

平成 26 年 3 月（25 日－30 日）の鳥山によるヘルシンキへの調査旅行では、フィンランド国立図書館にて資料収集を行い、クリミア戦争時の風刺画や 1912 年の祖国戦争百年祭の際の記念出版物など、祖国戦争の記憶の形を伝える帝政期の資料を引き続き収集した。この際、改装工事中の図書館の利用法に関しては、事前に訪問した北海道大学ヘルシンキ・オフィスにて有益な情報を得ることができた。

研究成果の公開：

本研究の調査旅行で得られた資料や知見を用い、研究会での議論の内容も踏まえつつ、現在（平成 26 年 6 月）、各自が論文の執筆を進めている。研究成果の公開については論集の出版という形を考えており、研究の進捗とは別の要因もあるため正確な時期を述べることはまだ難しいが、できるだけ早い時期に原稿をまとめ、公開することを目指している。